

幼年期児童の読み書き能力と

その指導

守屋光雄

はじめに

幼年期児童ということばをとくに使用したのには意味がある。普通幼児期というと、就学前の三才から六才頃までの子どもの時代を意味する。それは、それなりに、意味があることは言うまでもないが私は、この狭義の幼児期と就学後の一、二年を含めて、幼児期と呼ぶ。幼児期と学童期を区別して使うのは、主として、現在の学制の区分からきている。五、六才児と七、八才児とは発達の差異が大きいことはないが、これらをひっくりかかして、幼年期とすることは、発達心理学的にみても誤りではなからうし、さらに、この四、五才から、七、八才までの幼年期の教育を充実させるためには、四才以上の子どもの教育を義務制にすることが望ましいという考えが生まれてくる。つまり、現在の就学前二年と小学校二年までの四年間を義務制として、幼年学校とし、あとの四年を小学校とする、いわば、四、四制の学制をつくるということである。幼年期教育の重要性に

についてはここで改めて述べるまでもなく、教育学、心理学、社会学、医学などの研究が示す通りである。このように、幼年期という発達段階の区分は、子どもの発達上からも、この時期の重要性からも、また、新しい学制の構想からも、当を得ていると思う。

従来は、このような幼年期教育という考えが薄弱であったため、幼稚園と小学校の教育の関連性が充分でなく、その指導方針などにも一貫性を欠くところが少なくなかった。文字学習の問題についても然りである。

昨年の京都市における市教組の教研大会幼年教育分科会で、桃園幼稚園の西尾健子氏は次のような要旨の提案を行なっている。

幼稚園の保育内容は、健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作の六領域に分れており、小学校の教育課程と異って、生活指導を中心として、幼児の創造性や自発性を重視して指導している。このような幼稚園の保育から、小学校の教育をみると、あまり

にも、幼稚園、小学校の教育のへだたりがひどいように思う。とくに、問題があると思うのは、小学校の低学年の教育内容が、教科書中心にかたより、こうした教育が、幼稚園の保育に悪い影響を与えているのではないか。幼稚園で「文字を教えてほしい」という親の声も、このような事情から起ってくるのではないか。これらの問題点を考えると、幼稚園と小学校低学年の間の連絡を密にしなければならぬことを痛感する。”

この提案に対して、紫野小学校一年生担任の渋谷愛子さんは、次のように提案している。

“最近の低学年の教育には問題点が多い。一例をあげると、教育課程の改訂によって、教科書中心の学習にかたよった指導が多く、子どもを正しく伸ばすのに障害になるような事態さえ生じているようである。一年生を担任して最も困難を感じるのは、入学してきた子どもの能力に大きな差があることである。このことが、一年生の指導をたいへんやりにくいものにしてている。これらの問題点を解決するためには、入学前の教育を義務制にすることがたいせつである。”

ここに、提案された通り、文字学習の問題一つ考えても、幼稚園、小学校の教育課程の一貫性、幼年期教育の確立が必要となってくる。

ところで、幼年期児童の言語（とくに文字）指導の時期や方法について、従来種々の意見がある。主として、小学校側では「文字学習の指導は、義務教育である小学校で、本格的に教授さるべきも

のであるから、就学前には教える必要がない。せいぜい、自分の名前が読め、時には書ける程度でよい」と言う。幼稚園や保育所ではこの原則を認めつつも親の要望や園児獲得の手段として、文字を教えこむところが多い。しかし、中には、幼児の文字学習能力調査を行なって、その実態に即して文字指導を行なっているところもある。

幼年期における文字学習の研究

児童の言語発達の研究の中で、文字学習（読む、書く能力）に関するものでは、当然就学後の研究が多い。なかでも、国立国語研究所国語教育研究室の人たちによって、一九五三年以来つづけられた一連の研究は、就学時から卒業時までの言語発達能力を、聞く、話す、読む、書くの四つの下位能力について調査研究している。

字がどのくらい読めたり書けたりするかという研究は、文字学習の時期方法などについて種々書われているにもかかわらず、意外に少ない。

阪本一郎氏は、かつて（昭和二十七年）幼稚園、保育所八十施設の四才から六才六ヶ月までの幼児二八四名について、文字学習の実態を母親への質問に対する回答をもとにして調査している。

まず、自分の名前が読めるかどうかについては、仮名で自分の名が読めだすのが、四才半から五才半の間であり、漢字でも読めだすのが六才以後のようである。

次に、ひら仮名の読める子どもの割合は、少し読めるものから、みな読めるものまで合計すると、五才で五五%、六才で八四%のものが、多少とも、ひら仮名を学習していることになるが、みな読めるものは、六才半でも四〇%しかない。

次に、文字を書く能力の発達については、自分の名前を書けるかどうかという問いに対する母親の答によると、仮名で自分の名前を書くことは、すでに四才半ごろからはじまっており、五才で約五〇%、五才半で約七〇%ものが書け、六才では、書けないものが、ほとんどなくなっている。

ひら仮名がどのくらい書けるかについては、名前以外は書けないものが、五才児には、五〇%以上いる。しかし、六才児では、二〇%にへっている。書けるが鏡映文字(裏返し文字)が混じるものは、四才児は殆んど全部、四才半で約九〇%、五才乃至五才半で七〇%、六才乃至六才半でも約六〇%になっている。

なお 阪本氏は、幼児が絵本をどの程度読み且つ理解しているかについても、親の回答を求めているが、それによると、六才児でもまだ独立しては読めない、文字はある程度読めても文意が充分わからないから、絵の説明をしてほしがるものが多い。読むマネをするものが四才児で約三〇%ある、文字を読もうとするものが、五才で約二五%、六才で 約四五%になっている。

また、阪本氏の、読書レディネステストによると、自分の名前を読める段階は、読書年令五才半、一字ずつ拾い読みをする段階は、

六才乃至六才半となっている。

村石昭三氏が幼稚園児の読みについて調べたものによると、読める子の割合は女子の方が男子より多く、五才児は四才児より、四才児は三才児より文字力があり、文字を読む力は一九五〇年ごろより最近の方がはるかにすすんでいることが明らかにされた。

また、亀井けい子氏は、昭和三六年十一月高松幼稚園児 四才十ヶ月乃至五才八ヶ月 一二三名について、幼児の読み書き能力の実態を調査し、これを昭和二二年度小学校就学時の調査(初等教育研究資料第一集)と昭和三一年の高松幼稚園における調査結果と比較しその進歩の著しいことを指摘している。

調査の方法としては、読みの調査は、五十音を短かい文にして、これを教師の指示に従って一字ずつ読ませる。書く方の調査は、五十音を順序不同にならべ、一字ずつ書かせた。

まず、読む能力についてみると、昭和三一年の読みの正答率の最低は「ぬ・に」の五六%であるが、昭和三六年では「ぬ」の九〇%であり、読みの正答率の最高についてみると、昭和三一年は、八六%、昭和三六年は一〇〇%となっている。読みの正答率の最高と最低の差は、昭和三一年は三〇%、三六年は一〇%である。三六年の読みの最高と最低の中は、三一年よりせまくなっている。

書く能力についてみると、書きの正答率の最低は、三一年の「を」の一〇%、三六年の「を」の二八%となっている。最高は、三一年の「も」の八二%、三六年の「の」の九四%である。最高と最低の

差は、三一年は七二%、三六年は六六%である。

同様の傾向は、昭和二二年の調査と比較してもみられた。

このように、亀井氏の調査からも、読む能力は、書く能力より早く発達するばかりでなく、両能力は、昭和二二年及び三一年の調査に比べて、進歩がみられ、とくに、読む能力の差は著しかった。この幼稚園では、とくに文字指導を行なわず、且つ、家庭における文字指導も禁止しているにもかかわらず、このような結果になっていることは注目してよからう。

以上、いくつか紹介した研究は、就学前の幼児と就学後の児童を切りはなして行なったものが多かったが、幼稚園・保育所、小学校の子どもたちを対象として、文字学習の調査を試みたものがある。

その一つは、前述の京都教育研究会幼年教育分科会で討議のうえ、とりあげられたもので、保育所・幼稚園・小学校の教育乃至保育課程の一貫性と幼年期教育の確立の一つの手がかりとして、保育所・幼稚園の幼児（四、五才児）及び小学校一年生（京都市及び京都府下から抽出）につき、ひら仮名の読み、書き調査を行なった。

方法としては、ひら仮名の清音、濁音、半濁音をそれぞれ、単独の文字として、読む能力、書く能力を、個人別に調査する。調査は昭和三六年七月と九月に同一児童について行なった。

調査結果は第一表に示す通りで、七月↓九月の間に、文字学習率が増している。これには、七月調査によって、文字に対する興味関心が増したことが、とくに小学校の場合、夏休み中のワークブック、

絵日記による影響が考えられる。

学習が比較的容易なもの、は、こ、し、ん、い、と、か、困難なものは、れ、ほぬ、ね、む、き、け、へ、そ、な、などであった。画数の少ない字、似た字のない字は、おぼえやすい。頻度の少ない文字は、おぼえにくい。よく似た字は、まちがう。例えば、ぬーね、ろーる、わーれ、ほーは、左右反対にかきやすい字としては、く、ち、け、は、などがあつた。

私たちも、神戸幼年教育研究所附属幼稚園、年長児（人員第二表の通り）について、第一図のような調査用紙を準備して、ひら仮名七一字（清音四六、濁音二〇、半濁音五）を、ばらばらに印刷してあるのを、一字ずつ読ませたり、書か

	小学校(6才児)				幼・保育園(5才児)				幼稚園(4才児)			
	よ	む	か	く	よ	む	か	く	よ	む	か	く
月	7	9	7	9	7	9	7	9	7	9	7	9
グループ計	19校 1,496名	21	18	21	24園 1,926	24	8	8	4	4	1	1
清音46字	44.5字	44.9	41.3	44.3	24.3	28.9	13.2	17.7	15.1	17.0	5.1	7.5
濁音・半25字	21.2	23.6	18.0	21.3	9.0	11.5	3.3	5.6	5.1	7.2	4.2	4.5

第一表 保・幼・小 調査結果(京都)

第一図

よむ・かく		ひらがな調査記入用紙												
や	ろ	ほ	の	と	そ	こ	お	7月	9月	1月	7月	9月	1月	
		め	れ	ね	へ	せ	て	え	け	7月	9月	1月	7月	9月
わ	る	む	ふ	つ	ず	く	う	7月	9月	1月	7月	9月	1月	
		み	り	に	ひ	し	ち	い	き	7月	9月	1月	7月	9月
を	ら	ま	は	な	た	ま	か	あ	7月	9月	1月	7月	9月	1月
		ん	7月	9月	1月	7月	9月	1月	7月	9月	1月	7月	9月	1月

第二表 施行別被験児人員

性別	7月		9月		1月	
	よむ	かく	よむ	かく	よむ	かく
男	46	44	46	44	46	44
女	55	51	55	51	57	52

せたりする。個人別に、昭和三六年七月、九月、及び昭和三七年一月の三回調査した。

これらの結果を表示すると、第三表の通りである。この表からもわかるように、

読みの調査では、習得率は、清音において男女共に、一、二回に比べて、三回目が最も高い。濁音・半濁音は、それほどの上昇率は認められない。前述の京都教研資料（第一表）に比べると、何れも、本資料の方が上まわっている。（14頁第四表、第五表）

書字は、読字に比べて困難性を示すが、習得率は、時期の経過と共に上昇し、濁音は清音に比べて低い。清音においては、各回共女児が男児より上まわる傾向にある。清音、濁

音、半濁音の順に困難度がます。ここでも京都資料は、本資料より低い。

文字の難易性についてみると、読字では、ぬ、ね、る、ろ、れ、ほ など頻度の少ない文字や、よく似た字は、おぼえにくい。書字では、せ、そ、ぬ、ね、ほ、む、め、れ、ゆ などは、男女共困難である。濁音では、ぶ、ば、ぼ などの習得率が低い。く、ち、け は、ま など左右反対にかきやすい。これらの点については、京都資料も同様の傾向を示す。

京都資料が概して、本資料より文字学習率が低い、本資料が都市の幼稚園であるのに対して、京都の調査は、府下の農山村の幼児をも対象にしていることによるのではないかと考えられる。

小学校一年の京都資料によると、習得率は、清音九五％、濁音、半濁音九二％を示し、就学前より上昇しているが、上昇変容速度は幼稚園の方が上まわっている。

一月調査で習得率（とくに読みの）が著しくのびているのは、この時期における幼児の言語発達を刺激する言語環境（例えば、図鑑、カルタの使用）の影響も考えられる。

ところで、こうした調査にも問題点はある。例えば、文字群としての指導を可としている現在、個々の文字について調査することについても問題があり、五〇音や、濁音などのふくまれることばで、調査することを考える必要もある。その他、七月に読めて、九月に読めない同一文字をどう考えるか、濁音調査の場合のぎ行とだ行

第三表 (a) 平均売字 および書字数 (男児)

よ		む				か		く							
調査月	7 月	9 月	1 月	1 月	調査月	7 月	9 月	1 月	1 月	調査月	7 月	9 月	1 月		
調査人員	46 名		46 名		調査人員	44 名		44 名		調査人員	44 名		44 名		
	よめたの も	%	よめたの も	%	よめたの も	%	よめたの も	%	よめたの も	よめたの も	%	よめたの も	%	よめたの も	%
あ	27	58	31	67	43	93	あ	14	31	15	34	29	65		
い	31	67	31	67	40	87	い	19	43	20	45	35	79		
う	30	65	32	69	41	89	う	23	52	23	52	35	79		
え	28	60	28	60	38	82	え	15	34	13	29	28	63		
お	30	65	31	67	42	91	お	23	52	21	47	37	84		
か	30	65	32	69	44	95	か	25	56	25	56	40	91		
き	29	63	31	67	41	89	き	19	43	19	43	38	86		
く	31	67	32	69	41	89	く	12	27	16	36	28	63		
け	28	60	30	65	39	84	け	16	36	11	25	33	75		
こ	32	69	31	67	42	91	こ	24	54	21	47	38	86		
さ	29	63	30	65	37	80	さ	15	34	18	40	29	65		
し	34	73	34	73	44	95	し	19	43	21	47	38	86		
す	29	63	30	65	42	91	す	20	45	18	40	37	84		
せ	27	58	28	60	41	89	せ	8	18	8	18	26	59		
そ	25	54	26	56	34	73	そ	8	18	9	20	16	36		
た	34	73	38	82	44	95	た	17	38	20	45	39	88		
ち	27	58	28	60	36	78	ち	17	38	19	43	30	68		
つ	29	63	31	67	39	84	つ	15	34	17	38	29	65		
と	28	60	28	60	38	82	と	14	31	17	38	30	68		
な	28	60	30	65	40	87	な	15	34	17	38	31	70		
に	27	58	30	65	39	84	に	10	22	10	22	19	43		
ぬ	29	63	31	67	41	89	ぬ	16	36	20	45	28	63		
ね	20	43	25	54	37	80	ね	7	15	6	13	22	50		
の	27	58	26	56	35	76	の	7	15	9	20	18	41		
ほ	30	65	32	69	43	93	ほ	11	25	17	38	32	72		
ひ	26	56	29	63	37	80	ひ	14	31	14	31	24	54		
ふ	32	69	32	69	42	91	ふ	21	47	25	56	33	75		
へ	28	60	30	65	37	80	へ	11	25	11	25	17	38		
ま	25	54	27	58	39	84	ま	11	25	11	25	22	50		
み	23	50	27	58	38	82	み	7	15	12	27	24	54		
む	33	71	36	78	44	95	む	19	43	22	50	36	81		
め	32	69	34	73	44	95	め	16	36	13	29	30	68		
も	29	63	32	69	36	78	も	7	15	7	15	20	50		
や	29	63	30	65	42	91	や	6	13	7	15	23	52		
ゆ	30	65	33	71	42	91	ゆ	17	38	23	52	33	75		
よ	31	67	33	71	41	89	よ	13	29	12	27	23	52		
ら	31	67	31	67	41	89	ら	9	20	8	18	17	38		
り	30	65	31	67	43	93	り	11	25	14	31	31	70		
る	26	56	30	65	39	84	る	16	36	12	27	26	59		
ろ	28	60	32	69	42	91	ろ	19	43	18	40	33	75		
わ	31	67	31	67	42	91	わ	14	31	17	38	31	70		
ん	24	52	27	58	34	73	ん	7	15	5	11	11	25		
を	30	65	31	67	40	87	を	18	40	17	38	29	65		
	27	58	28	60	36	78		10	22	11	25	22	50		
	29	63	33	71	33	71		10	22	13	29	15	34		
	26	56	29	63	41	89		6	13	7	15	23	52		

をどうするか、保育所、幼稚園で行なう場合、とくに子どもに与える心理的影響、保母、教師、親の理解の必要性などを考慮すること

など、いくつかの問題点が反省されねばならぬ。

おわりに——指導

の問題

拙稿のはじめの部分で述べたこと、文字学習に関するいくつかの調査研究の結果などからもわかるように最近の幼児（とくに都市）においては、読み書き能力（とくに読みの力）は、過去の幼児に比べ著しく発達してきている。これも、幼児期における発達加速現象の一徴候ともいえるよう。

したがって、文字学習——とくに読みの学習は就学前の幼児においても可能であり、幼児の読みのレディネス、言語に対する興味、関心を無視するのではなく、言語発達を刺激する環

第三表 (b) 平均読字および書字数 (女兒)

よ				む				か				く			
調査月	7 月		9 月		1 月		調査月	7 月		9 月		1 月			
調査人員	55 名		55 名		57 名		調査人員	51 名		51 名		52 名			
	よめたの も	%	よめたの も	%	よめたの も	%	かけたの も	%	かけたの も	%	かけたの も	%			
あ	39	70	42	76	56	98	あ	30	58	26	50	45	86		
い	39	70	41	74	55	96	い	33	65	35	68	46	88		
う	38	69	41	74	54	95	う	33	65	35	68	47	90		
え	38	69	40	72	55	96	え	24	47	29	56	41	79		
お	39	70	42	76	56	98	お	33	65	39	76	48	92		
か	43	78	44	80	56	98	か	30	58	34	66	48	92		
き	41	74	42	76	55	96	き	27	52	33	65	46	88		
く	39	70	42	76	55	96	く	16	31	22	43	44	84		
け	35	63	36	65	52	91	け	21	41	35	68	45	86		
こ	41	74	46	83	57	100	こ	35	68	39	76	48	92		
さ	32	58	35	63	52	91	さ	26	50	27	52	39	75		
し	40	72	40	72	55	96	し	30	58	28	54	51	98		
す	36	65	41	74	54	95	す	29	56	30	58	47	90		
せ	33	60	36	65	53	93	せ	16	31	22	43	34	65		
そ	29	52	31	56	48	84	そ	13	25	16	31	30	57		
た	41	74	45	81	54	95	た	28	54	32	62	45	86		
ち	33	60	38	69	53	93	ち	25	49	32	62	45	86		
つ	35	63	37	67	52	91	つ	21	41	28	54	36	69		
て	34	61	40	72	54	95	て	23	45	32	62	46	88		
と	37	67	37	67	56	98	と	26	50	33	65	45	86		
な	33	60	46	83	52	91	な	19	37	22	43	37	71		
に	35	63	34	61	53	93	に	23	45	28	54	42	81		
ぬ	30	54	34	61	48	84	ぬ	11	21	14	27	30	57		
ね	29	52	31	56	49	86	ね	9	17	20	39	32	61		
の	42	76	43	78	55	96	の	30	58	37	72	49	94		
ほ	30	54	33	60	48	84	ほ	18	35	23	45	36	69		
ひ	40	72	40	72	54	95	ひ	31	60	29	56	45	86		
ふ	30	54	32	58	51	89	ふ	12	23	13	25	32	61		
へ	29	52	30	54	49	86	へ	15	29	20	39	39	75		
ま	30	54	32	58	49	86	ま	9	17	17	33	35	67		
み	41	74	51	92	53	93	み	27	52	34	66	46	88		
む	42	76	45	81	56	98	む	35	68	32	62	46	88		
め	30	54	33	60	51	89	め	12	23	12	23	30	57		
も	37	67	38	69	54	95	も	15	29	22	43	36	69		
や	36	65	40	72	54	95	や	23	45	26	50	45	86		
ゆ	37	67	41	74	53	93	ゆ	20	39	21	41	38	73		
よ	32	58	35	63	53	93	よ	14	27	15	29	29	55		
ら	39	70	38	69	54	95	ら	24	47	27	52	39	75		
り	34	61	36	65	53	93	り	20	39	18	35	41	79		
る	40	72	42	76	55	96	る	23	45	27	52	41	79		
れ	33	60	34	61	54	95	れ	23	45	23	45	42	81		
ろ	30	54	34	61	51	89	ろ	10	19	14	27	28	53		
わ	31	56	36	65	53	93	わ	20	39	19	37	42	81		
ん	31	56	33	60	51	89	ん	18	35	16	31	36	69		
を	38	69	41	74	54	95	を	16	31	27	52	22	40		
	33	60	35	63	49	86		7	13	9	17	41	79		

境を与えて、個人的にも、集団的にも、文字指導をして差し支えない。但し、この場合も文字を文字として与えるのではなく、コトバと

して、意味をよく理解させた上で、指導する必要がある。同じく、文字学習でも、書く方の力は読む力よりおくれ、個人差

も比較的大きいし、就学前では、書きのレイダネスも成熟していない。したがって、書くことはあまりあせって指導しない方がよい。子どもが書くことに興味を持ち、教わろうとするなら、教えてもよい。しかし、この場合も、一字一字をバラバラに教えるのではなく、一つのコトバとして教えることは、読みの指導の場合と同じである。前述の通り、幼児の書く文字には、裏返し文字が多い。これは、幼児の方行知覚が未発達であること、相対的関係把握が困難であるなどの特性によるもので、発達の事象であるから、そう問

第三表 (c) 平均読字および書字数 (男児)

よ		む		か		く	
調査月	7 月	9 月	1 月	調査月	7 月	9 月	1 月
調査人員	46 名		46 名		調査人員	44 名	
	よめたの	%	よめたの	%	よめたの	%	よめたの
が	30	65	30	65	39	85	
ぎ	29	63	27	59	35	76	
ぐ	30	65	26	57	35	76	
げ	27	59	27	59	36	78	
ご	30	65	34	73	36	78	
ぎ	27	59	26	57	31	67	
じ	34	73	31	67	36	78	
ず	29	63	29	63	37	80	
ぜ	29	63	29	63	34	74	
ぞ	27	59	26	57	35	76	
だ	26	57	29	63	37	80	
ち	21	46	26	57	29	63	
づ	27	59	25	54	34	74	
で	21	46	26	57	35	76	
ど	32	70	27	59	36	78	
ぼ	22	48	21	46	35	76	
び	28	61	26	57	33	71	
ぶ	25	54	26	57	33	71	
べ	27	63	24	52	33	71	
ぼ	20	43	22	48	32	69	
ば	18	39	19	41	26	56	
び	21	46	20	43	29	63	
ぶ	18	39	20	43	29	63	
べ	17	37	21	46	27	58	
ぼ	25	54	17	37	28	60	

題にすることもないが、子どもの書くのにまかせっ放しだと、わるいクセをもつかなと限らないので、親や教師が教える時は、正し

第三表 (d) 平均読字および書字数 (女児)

よ		む		か		く	
調査月	7 月	9 月	1 月	調査月	7 月	9 月	1 月
調査人員	55 名		57 名		調査人員	52 名	
	よめたの	%	よめたの	%	よめたの	%	よめたの
が	34	62	37	67	55	96	
ぎ	28	51	33	60	48	84	
ぐ	29	53	31	56	48	84	
げ	29	53	32	58	51	89	
ご	30	54	33	60	53	93	
ぎ	25	45	27	50	44	77	
じ	23	42	36	65	50	87	
ず	31	56	42	76	51	89	
ぜ	27	50	34	62	49	86	
ぞ	24	44	32	58	49	86	
だ	30	55	33	60	52	91	
ち	24	44	27	50	42	73	
づ	29	53	32	58	48	84	
で	27	50	34	62	50	87	
ど	32	56	33	60	50	87	
ぼ	28	51	30	55	40	70	
び	28	51	31	56	45	79	
ぶ	27	50	30	55	47	82	
べ	25	45	28	51	45	79	
ぼ	23	42	26	47	44	77	
ば	18	33	24	44	38	66	
び	23	42	25	45	37	65	
ぶ	18	33	19	35	35	61	
べ	18	33	18	33	35	61	
ぼ	22	40	24	44	37	65	

い書き方を教えるべきである。読む字もそうであるが、書く字は、あまり小さく書かさない方がよい。

第四表 読字習得数

調査月日		7 月		9 月		1 月	
		調査人数	男女	男女	男女	男女	
方法	文	46名	46	46	46	57	
	字	55	55	55	55	57	
よ	清音 (46字)	平均	28.7	30.5	39.8	42.7	
	濁・半濁音 (25字)	平均	13.9	13.7	18.1	19.9	
		男女	29.7	31.9	42.7		
		京都	24.3	28.9			
		男女	11.9	13.6	19.9		
		京都	9.0	11.5			

第五表 書字習得数

調査月日		7 月		9 月		1 月	
		調査人数	男女	男女	男女	男女	
方法	文	44名	44	44	44	52	
	字	51	51	51	51	52	
か	清音 (46字)	平均	14.8	15.7	28.0	40.3	
	濁・半濁音 (25字)	平均	7.1	8.4	10.9	13.9	
		男女	19.7	23.2	40.3		
		京都	13.2	17.7			
		男女	5.9	7.4	13.9		
		京都	3.3	5.6			

ところで、就学前に、このような方法である程度文字学習が可能であり、したがって、文字指導も必要であることがわかって、わが国の就学前教育は義務制になっていないし、保育所、幼稚園、小学校との間にも一貫した保育カリキュラムもなく、各保育所、各幼稚園でも、バラバラな方針で保育が行なわれている。とくに、日本の保育所、幼稚園は、私立のものが大部分であるため、親のまちがった児童観に迎合したり、親の虚栄心に乘じて、園の経営の方途が

講ぜられたりしがちであるから、一方で幼児の発達の研究がさらに深められると共に、就学前教育の義務制化、幼年期教育の確立ということを、改めて、真剣に考えなければならぬ。
なお、念のため、つけ加えて述べておくが、幼年期における言語指導は、単に、読み書きの指導だけが大事ではなくて、相手の話を聞き且つ理解すること、自から、相手（個人またはグループ）に対して話し、発表することの訓練、一方的に聴き、話すだけでなく、お互に話し合い、伝えあうことの保育が、さらに肝要であることを忘れてはならない。

(立命館大学)

参考文献

- 守屋光雄 発達心理学 朝倉書店
- 守屋光雄他 幼年期児童におけるひらがなの読み書き調査について 日本保育学会第十五回大会 発表論文抄録
- 五回大会 発表論文抄録
- 安達泰一 ひらがなの読み書き調査 京都の教育11 教育全国集会レポート集
- 亀井けい子 幼児の読み書き能力について 日本保育学会第十五回大会発表論文抄録
- 阪本一郎 就学前の文字学習の問題 教育心理 第三巻 第八号
- 保育診断講座 3、幼児は保育でどうかわったか 黎明書房
- 国立国語研究所年報 五一一
- 国立国語研究所報告七、二〇、一四、一七
- 村石昭三 幼稚園児のリテラシー 読書科学 四巻 一号

* * * * *